東亜臨床心理学研究　VOL.21　2022（Pp. 3～9）

論　　文

学校現場におけるPCAグループの継続的かつ全学的な取り組み

――そのための条件と基本的視点――

本山智敬[*1]・村山正治[*2]

要　約

本研究では、学校現場において、PCAグループを単発で行うのではなく、継続的かつ全学的に行なっていくための条件や基本的視点について論じることを目的とする。実際の実践事例として、高等学校にて教員主体で取り組んでいる事例と、中高一貫校にて中学・高等学校の接続を意識した長期的な視野で取り組んでいる事例を提示した。考察では、学校現場の状況を理解し、教員とPCAの基本概念を共有しつつ、教員の主体性を尊重した協働を実現していくことの重要性が示された。

キー・ワード：PCAグループ、高等学校、中高一貫校

Ⅰ．問題と目的

PCAグループ（鎌田ら, 2004；村山, 2014など）は、現在様々な領域で実践が行われており、学校現場もその一つである。学校現場で行われるグループ・アプローチとしては、構成的グループ・エンカウンター（國分, 1981; 1992）がその代表であるが、PCAグループはその流れを取り入れつつも、エクササイズを中心に行う構成的グループ・エンカウンターの方法にこだわらず、パーソンセンタード・アプローチ（PCA）の基本的視点を重視したグループ実践として位置付けられる。また村山はスクールカウンセラーが実践するPCAグループのポイントと意義を論じている（村山, 2021）。

筆者もPCAグループを実践してきた一人であるが、特にPCAグループをその集団や組織の風土づくりや組織改革に活用していけないかと考えている（本山, 2020）。学校現場でそれを実現していくためには、PCAグループの実践を継続的、全学的な取り組みにしていく必要がある。ここで、従来の実践形態と筆者が考える実践形態を整理したい。

図に示すように、従来のグループ実践では、筆者のような学外者に依頼があり、その人が計画を立てて、当日もファシリテーターを行うことが多い。その際、担任教師をはじめとした学校教員は、見学か補佐役、あるいは生徒たちと同様に参加者として関わるのがほとんどである。また、実施回数も少なく、筆者の場合は、４月当初の仲間づくりや学校適応を目的として行われる合宿の中の一企画として、単発で行われることが多かった。それに対し、筆者が現在取り組んでいる形態では、PCAグループが校内活動の一環として位置付けられ、継続的に実施されている。また、その内容については、学校教員との綿密な打ち合わせのもとで計画を立てている。学校によっては学校教員が中心となってグループ活動を計画し、実施も教員が

[*1] 福岡大学 人文学部
[*2] 東亜大学大学院 総合学術研究科

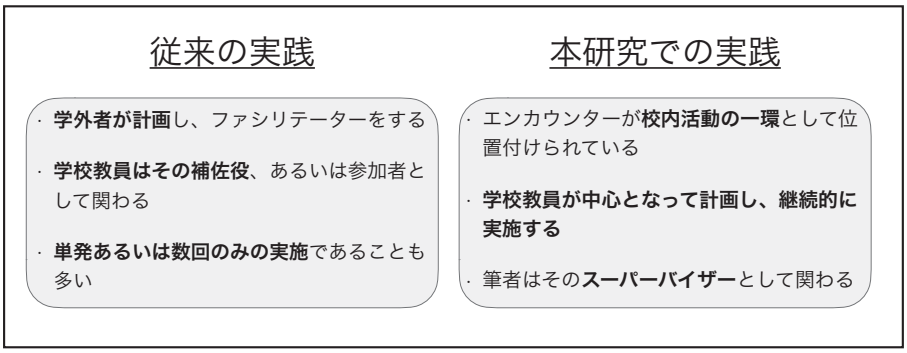

図　PCAグループの従来の実践と本研究での実践の違い

ファシリテーターを行い、筆者はその取り組みのスーパーバイザーとして関わる形をとっている。このようにPCA グループがその学校に根づき、筆者が主導的に実施しなくともその実践が継続されていくためには、いくつかの条件が存在すると思われる。また、筆者のような立場の者が教員の取り組みにどのようにかかわり、支援していくのか、その点についても整理する必要がある。

よって本研究では、筆者が現在行っている実践例を紹介し、PCA グループが学校現場に浸透していくための条件やその支援のポイントについて検討することを目的とする。

Ⅱ．事例

筆者が実践しているのは、公立の高等学校と中高一貫校の 2 校である。それぞれの事例をまとめる。

1. 事例 1 ：高等学校において教員主体で実施している事例

A 高校は各学年 4 ～ 5 クラス、全校で約 500 名の生徒が在籍している。筆者は X 年度より授業の中で PCA グループを行っている。X 年度はまず、4 月に 1 年生全 5 クラスに仲間づくりのワークを実施した。その後は 3 クラスに継続的に行い、年間で各クラスに計 6 回ずつ実施した。それぞれ、生徒同士が無理なくコミュニケーションを図れるような内容となっている。

続く X ＋ 1 年度は、1 年生は前年度と同様の計画で、加えて 2 年生の 3 クラスを継続で、計 6 クラスを対象に、年間で各クラス 5 ～10 回実施した。年間の総実施回数は 41 回で、多いクラスはほぼ毎月実施したことになる（表）。

X ＋ 2 年度は、1 年生の 4 月に 5 クラス実施するのみで、その後の継続実施はなされなかった。さらに、X ＋ 3 年度と X ＋ 4 年度は筆者が在外研究で海外にいたため、筆者による実施はなかったが、その代わりに、生徒支援の担当教員を中心として教員が自ら計画して実践が行われた。筆者の帰国後も引き続き各クラスの担任／副担任にファシリテーターを担当していただくことにした。方法としては、生徒支援担当教員が年間プログラムを計画し、各クラス担任にその内容を事前に伝えておく。そして、同じ授業時間に 1 年生の全クラスが同時進行で同じワークを実施する。筆者は計画の段階からサポートし、実施日当日は各クラスを巡回し、終了後は教員と振り返りを行い、合わせて次回のワークのリハーサルを行うなどして、主に教員の実践の後方支援を行った。その後、生徒支援の担当教員が異動となったが、別の学校から異動してきた教員が引継ぎ、X ＋ 8 年目は、1 年生に加えて 2 年生の教員も可能な範囲で実践を試みている。筆者も定期的に生徒支援の担当教員と連絡を取り合っている。

表　年間スケジュール

学年	組	4月		5月			6月		7月	
		15日(火)	17日(木)	11日(合宿研修)	27日(火)	29日(木)	17日(火)	19日(木)	8日(火)	10日(木)
1	A	①テーマビンゴ		②脱出ゲーム						
	B	①テーマビンゴ		②脱出ゲーム	③風船バレー		④文字並べ		⑤80マス作文	
	C		①テーマビンゴ	②脱出ゲーム	③風船バレー			④文字並べ		⑤80マス作文
	D		①テーマビンゴ	②脱出ゲーム		③文字並べ	④コイン渡し		⑤80マス作文	
	E		①テーマビンゴ	②脱出ゲーム						
2	A				①風船バレー		②文字並べ		③80マス作文	
	B					①テーマビンゴ		②文字並べ		③80マス作文
	C					①テーマビンゴ	②文字並べ			③80マス作文

学年	組	9月		10月	12月	1月		2月	
		16日(火)	18日(木)	21日(火)	4日(木)	22日(木)	27日(火)	19日(木)	24日(火)
1	A								
	B	⑥コイン渡し		⑦定番ゲーム	⑧記憶力ゲーム	⑨改訂人狼ゲーム			⑩言葉のプレゼント
	C		実施なし	⑥コイン渡し	⑦記憶力ゲーム	⑧改訂人狼ゲーム		⑨言葉のプレゼント	
	D	⑥定番ゲーム		⑦宝の地図	⑧記憶力ゲーム	⑨改訂人狼ゲーム			⑩言葉のプレゼント
	E								
2	A	④コイン渡し					⑤記憶力ゲーム		⑥言葉のプレゼント
	B		実施なし				④記憶力ゲーム	⑤言葉のプレゼント	
	C		実施なし				④記憶力ゲーム	⑤言葉のプレゼント	

2. 事例2：中高一貫校において実施している事例

B中学校の教員からの依頼でX年（A高校とは年度が異なる）よりPCAグループの実践が始まった。B中学校はC高校の附属中学校で、1学年2クラス、全校で約240名である。中高一貫校であり、高校進学時に高校から入学してきた生徒とクラスは交わることなく、実質、中学校に入学したときの同じ学年80名でその後の6年間の学びを共にすることになる。そのため、依頼してきた教員としては生徒同士の仲間づくりの重要性を感じ、その手立てとしてエンカウンターを取り入れることを考えたのである。初年度のX年は、1年生の2クラスを対象として、年間で計3回、各学期ごとに実施した。内容としては、1学期の6月にゲーム的な要素の高い「テーマビンゴ」、2学期の9月に「無人島SOS」というコンセンサスゲーム、3学期の1月に「こころの花束」というポジティブ・フィードバックのワークを行った。また、夏休み期間に中学校の教員全員に対して、こうしたグループワークの意義に関する職員研修を実施した。

X＋1年目は、C高校からも依頼があり、5月に1年生の全6クラスに仲間づくりのワークを行った。また、10月には高校の教員全体での職員研修を行い、生徒へ実践しているグループの意義について話をした。B中学校での実践も継続しており、年間で1年生に3回、2年生と3年生にそれぞれ2回の計画で進めている。

Ⅲ. 考察

1. 教員主体のグループ実践が有効に機能するための条件

まずは、こうしたグループ実践が教員主体で有効に機能するための条件について、1）学校全体の姿勢、2）担当教員の理解と協働、3）グループ実践の共有の3点に分けて考察する。

1）学校全体の姿勢

A高校では、もともとコミュニケーション能力の育成を重視している。大学への進学よりも、社会に出て就職する生徒が多いため、学校としては「生徒が社会に出た時に、周りの大人から受け入れてもらえるように」という言葉をスローガンに、生徒支援の担当教員を中心に様々な取り組みがなされてきた。それによって、生徒支援の充実や生徒の退学率の低下といった成果があらわれている。PCAグループの導入、そしてそれが次第に教員主体で実践されるようになってきた経緯に、こうした学校全

体の姿勢が関係していることは言うまでもない。学校側の意向とPCAグループの趣旨とがうまくマッチした結果である。

B中学校、C高校では、こうしたグループワークの導入が学校全体の姿勢と十分にすり合わせられているわけではないが、校長からの理解が得られている。学校は基本的に校長のリーダーシップが学校運営に大きく関係するため、校長の理解は学校全体の姿勢と関連し、今後学校として主体的、継続的に取り入れていく可能性があるだろう。

2）担当教員の理解と協働

担当教員がPCAへの理解があることが学校側の主体的な実践につながっていると言える。A高校での生徒支援担当教員がPCAやエンカウンターといったグループワークの意義を理解していることで、他の教員とのつなぎ役となり、結果として学校全体の協力を得やすくなっている。それはB中学校やC高校でも同じことが言える。担当教員の他にも、保健室の養護教諭もそうした役割を担っている。担当教員と養護教諭とが連携して筆者の窓口となってくださり、学校側の受け入れ態勢が作られている。

また、どの学校でも、教員側から様々なアイデアが出てきて、グループ実践を続けていく上で筆者が一方的に提案するのではなく、互いに意見を出し、尊重しあって作っていく関係が生まれている。こうした協働関係が、その学校に合った独自の実践内容の構築につながり、同時に継続的実践の基盤となっている。

3）グループ実践の共有

A高校では、最初の3年間は筆者がファシリテーターを行い、教員にその実践の様子を見ていただいた。オブザーバーの形でいてもらったり、クラス担任には一緒に参加してもらうこともあった。そうして、こうしたグループが実際にどのように進められるのかをまずは知っていただいた。さらに、そのグループに参加している生徒たちがどのように体験しているのかを直に見てもらうことも重要である。その場での生徒たちの表情や普段の学校生活では見せないような振る舞い、体験後の感想に書かれた文章などから、生徒たちの生の様子や変化を感じ取ることができる。こうして、実践場面で何が起こっているのか、その様子を共有し、積み重ねていくことが、その後の教員主体のグループ実践につながっていくと思われる。職員研修で理論的なことを伝え、実際の様子は生徒たちの反応を見てもらうことが、こうしたグループ実践の意義を理解してもらうのに有効である。

まだ継続年数が浅いB中学校とC高校では、今も筆者がファシリテーターを担当している段階である。教員がファシリテーターを行うことを決して急がず、まずはしっかり見ていただき、実践を共有していくことが重要なプロセスであると考える。

2. 学校での実践における基本的視点

学校現場においてこうしたグループ実践を浸透させていくためには、どのような支援が必要だろうか。その基本的視点について、1）PCAグループの基本概念の共有、2）教員の主体性の重視、3）教員独自の工夫への尊重の3点を挙げる。

1）PCAグループの基本概念の共有

まずは、なぜこのようなグループを行うのか、それによって生徒たちにどのような体験を提供しようとしているのか、そうした基本概念を共有することが重要である。エンカウンターのようなグループを行おうとする際、一般的にはエクササイズ選びから始めることが多い。しかし、エクササイズは実施者が参加者に体験してもらいたいことを提供しやすくするための手段に過ぎない。よって、どのようなことを生徒たちに体験して欲しいのか、その点を明確に持つことが先なのである。そうした考え方を筆者は「コミュニケーション・デザイン」と呼んでいる（本山, 2014a）。PCAの基本概念としては、個人の尊重やファシリテーションの視点などが挙げられる（本山, 2014b）。ゲーム的な要素の高いエクササイズを取り入れることがなぜ

個人の尊重につながるのか、実施中の臨機応変なファシリテーションがなぜ生徒の主体的参加を促進するのかなど、見ているだけではわかりづらい視点を、職員研修や実践後の振り返りの場で伝えていくのである。

2）教員の主体性の重視

一方で、実施する教員自身の主体性が損なわれないようにすることも大事な支援の一つになると考える。生徒の日々の様子をみているのは教員であり、クラス担任と生徒との関係性の中でしか見えないものもある。教員がグループ実践を行う上では、生徒との普段のかかわりを通しての感触を大事にして欲しい。生徒の様子を見ながら、状況に応じて適宜エクササイズのやり方に修正を加えてもよい。それがまさにコミュニケーション・デザインの視点でもある。教員の中には、エクササイズの手順は決められており、その通りに進めなければいけないと思っている人もいるかもしれない。そうではなく、エクササイズはあくまでも手段に過ぎないという視点から、エクササイズの進め方を厳密に捉え過ぎず、教員が主体的に変更を加えていけるように働きかけていくことが重要である。

A高校では、生徒支援担当教員が自らオリジナルのエクササイズをいくつか考案している。それらは、その高校の生徒の特徴を理解した上で開発されたものであり、細やかな工夫がなされている。当然ながらそれはその高校の生徒にフィットしており、生徒の満足度も高い。

3）教員独自の工夫への尊重

参加する生徒の様子に合わせてエクササイズを修正したり、新たに考案したりするのと同時に、実施する教員それぞれの持ち味を生かした工夫を行っていくことも推奨していきたいと考えている。A高校では、同じエクササイズを行う際も、クラスによってその進め方が異なっている。体育の先生は実施場所を教室から体育館に変更し、より動きやすい環境を整えた。国語の先生は黒板に縦に文章を書き、手順を見やすく提示し、同様のことを数学の先生は図表にして表したり、パソコンの得意な先生はスライドを作成して投影して見せた。それぞれの先生が自分の持ち味に沿って工夫をしていくことで、その先生らしい実践につながり、そのクラスに合った体験の仕方となるのである。

そう考えると、エクササイズを選定した時に、ある程度の手順は示しても、敢えて詳細には決めてしまわない方が、教員独自に工夫する余地が生まれるだろう。指示した通りにエクササイズが進められたかどうかには特にこだわらず、教員が自由な発想で組み立てていく方が良い。

Ⅳ．まとめ

PCAグループが実現しようとしている風土を学校現場に作るとすれば、初期の頃はこちらがファシリテーターを担当し、教員とその体験を共有していく必要があるが、いずれは次第に教員自身がその実践を行い、その取り組みを支援していく体制を作っていくことが重要であろう。そのためには、こちらがプログラムを作り込まず、教員が主体的に作っていけるような工夫が求められる。具体的には、グループ実践の基本概念は共有しても、エクササイズの手順を厳密に決めないでおいたり、各教員の持ち味を生かしたファシリテーションを推奨するなどである。つまり、筆者らと教員は「指導する者とされる者」の関係ではなく、共に作り上げていく協働の仲間である。

引用文献

鎌田道彦・本山智敬・村山正治（2004）：学校現場における PCA Group 基本的視点の提案―非構成法・構成法にとらわれないアプローチ―心理臨床学研究, 22(4), 429-440.

國分康孝（1981）：エンカウンター　心とこころのふれあい　誠信書房.

國分康孝（1992）：構成的グループ・エンカウンター　誠信書房.

本山智敬（2014a）：コミュニケーション・デザインの視点からみたファシリテーションの検討―高校生対象の構成的グループ・エンカウンターの事例をもとに―福岡大学研究部論集B：社会

科学編, 7, 15-20.
本山智敬（2014b）：大学１年次演習科目への導入の試み　村山正治（編）*「自分らしさ」を認める PCA グループ入門　新しいエンカウンター・グループ法*　創元社, 81-100.
本山智敬（2020）：エンカウンター・グループの今後の展開に向けて　人間性心理学研究, 38(1), 15-22.
村山正治（2014）：PCA グループの理論と実際　村山正治（編）*「自分らしさ」を認める PCA グループ入門　新しいエンカウンター・グループ法*　創元社, 12-26.
村山正治（2021）：スクールカウンセリングの新しいパラダイム　遠見書房, 58-67,　92-102.

A Continuing and Organizational Approach of PCA Group at School : The Conditions and Basic Viewpoints

Tomonori Motoyama[*1], Shoji Murayama[*2]

Abstract

The purpose of this study is to discuss the conditions and basic viewpoints for conducting a PCA group continuously and organizationally, rather than conducting it in a single session at school. Actual cases were presented where teachers are mainly conducting a PCA group in high school and where practitioners are conducting it from a long-term perspective with an awareness of the connection between junior high school and high school. In the discussion, it was shown that it is important to understand the situation at the school site, share the basic concept of PCA with teachers, and realize collaboration that respects the independence of teachers.

Key words：PCA Group, high school, combined junior and senior high school

---

[*1] Faculty of Humanities, Fukuoka University
[*2] Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia